

公立大学法人前橋工科大学
令和 4 年度業務実績に関する
評価報告書

令和 5 年 1 1 月

前橋市公立大学法人評価委員会

目次

I	評価の考え方	1
	1 基本的な考え方	
	2 評価方法	
II	全体評価	2
III	項目別評価	4
	1 大学の教育研究等の質の向上に関する目標を達成するための取組	
	(1) 教育に関する目標を達成するための取組	
	(2) 研究に関する目標を達成するための取組	
	(3) 地域貢献に関する目標を達成するための取組	
	(4) 国際交流に関する目標を達成するための取組	
	(5) 教員の資質向上に関する目標を達成するための取組	
	2 業務運営の改善及び効率化に関する目標を達成するための取組	
	3 財務内容の改善に関する目標を達成するための取組	
	4 自己点検・評価及び情報公開に関する目標を達成するための取組	
	5 その他業務運営に関する重要な目標を達成するための取組	
	用語解説	12
	委員名簿	13

I 評価の考え方

前橋市公立大学法人評価委員会は、地方独立行政法人法の規定に基づき、公立大学法人前橋工科大学の令和4年度の業務実績について、次の考え方等により評価を実施した。

1 基本的な考え方

- (1) 中期目標の達成に向けた、法人の中期計画及び年度計画の実施状況を確認する。
- (2) 法人の特筆すべき取組や成果を積極的に評価する。
- (3) 評価を通じて、法人の管理運営、大学の教育研究の質的向上を図る。
- (4) 法人の管理運営、大学の教育研究などの実績及びそれに対する評価は広く関係者に公表する。

2 評価方法

(1) 評価の進め方

年度業務実績評価は、法人から提出された「令和4年度業務実績に関する報告書」を踏まえ、その自己点検及び自己評価の内容が適切かどうかという視点で「全体評価」及び「項目別評価」を行う。

(2) 「全体評価」

令和4年度の法人の業務実績全体について総合的な評価を行う。

(3) 「項目別評価」

中期目標における目標区分ごとに業務の実施状況を確認し、4段階の評価基準により評価を行うとともに、特筆すべき点や今後に期待する点についての講評を付す。

(目標区分)

1 大学の教育研究等の質の向上に関する目標	
(1) 教育に関する目標	年度計画 No. 1～No. 14
(2) 研究に関する目標	年度計画 No. 15～No. 23
(3) 地域貢献に関する目標	年度計画 No. 24～No. 32
(4) 国際交流に関する目標	年度計画 No. 33～No. 34
(5) 教員の資質向上に関する目標	年度計画 No. 35～No. 40
2 業務運営の改善及び効率化に関する目標	年度計画 No. 41～No. 45
3 財務内容の改善に関する目標	年度計画 No. 46～No. 54
4 自己点検・評価及び情報公開に関する目標	年度計画 No. 55～No. 58
5 その他業務運営に関する重要な目標	年度計画 No. 59～No. 76

(評価基準)

評点	定義
A	中期計画の達成に向けて特筆すべき進捗状況にある。
B	中期計画の達成に向けて概ね順調な進捗状況にある。
C	中期計画の達成に向けてはやや遅れた進捗状況にある。
D	中期計画の達成に向けては進捗が著しく遅れており、 重大な改善事項がある。

【参考：法人による自己評価の評価基準】

評点	定義
A	年度計画を上回って実施している。
B	年度計画を計画どおりに実施している。
C	年度計画をやや遅れて実施している。
D	年度計画を実施していない。

II 全体評価

令和4年度は、第2期中期目標期間の4年目の事業年度であり、長引く新型コロナウイルス感染症の影響の中、徐々に社会活動が再開され始める機運にあり、2学群制になってからの初年度であった。旧課程と新課程が混在し、様々な変革が行われている中、令和4年度の事業実施状況全体では、新型コロナウイルス感染症の影響による業務の停滞がほぼなくなり、76項目のうち、年度計画を上回って実施している（A評価）が1項目（1.3%）、年度計画を計画どおりに実施している（B評価）が75項目（98.7%）だった。令和元年度以降、A評価及びB評価の比率が年々上がり、令和4年度には100%に達しており、業務実績の補足事項を見ると全体的に前年比・前々年比を大きく上回っている。これは、新型コロナウイルス感染症の影響の中でも工夫を重ねてきたことが良い結果となって現れたものであって、年度計画を順調に推進していることを示している。これらは、大学全体の努力の成果であり、評価できる点だと考える。そのため、全ての業務実績についてB評価以上としたい。

まず、業務実績に関する報告書中の「特筆すべき成果」において、大学院教育について、前年度まで講義室で1人ずつ行っていた博士前期課程の研究発表を新たにポスターセッションで実施するとともに聴講対象を学内に限定していたものを新たに市内企業等の参加を促し一般公開として実施している。これは、分野間での交流促進を図ったものとして高く評価できる。特に43社73人の市

内企業等の参加があったことは、市内企業の関心の高さを示していると考えられる。また、92人の学部生の聴講があったことは、大学院への内部進学への促進にも寄与していると考えられ、効果的な取組であったと評価できる。

また、この分野横断型シンポジウムは、大学の研究を対外的にPRする場所を新たに設けたこととなり、シンポジウム開催の意図を広げるものであり、計画を上回る取組であると考えられる。

研究活動においては、産官学連携コーディネーター※1を中心に、関係機関や企業との連携を強化したことで、市内・県内企業だけでなく県外企業を含めた共同研究実施件数が前年度と比較して17件増加したことは、評価できる。

また、研究成果の社会への還元においては、論文投稿数が前年度と比較して2割増加し、それに合わせて論文掲載数についても、前年度の79編よりも6編増加し、85編となっている。4年間で最も多い掲載数となったことは、研究発表の量的増加だけでなく、質的向上も示しており、高く評価できる。

これは、教員への意識啓発の成果であり、教員全体のレベル向上にもつながっていく意義のある取組である。

また、令和5年度からソーシャルデザイン研究センター及びバイオサイエンス研究センターを新たに設置するため、地域貢献、研究及び産学連携活動を包括的に行うための組織として研究・産学連携推進本部を置くこととし、二つの研究センターの稼働に向けた取組を行ったことを高く評価する。

一方で、年度計画を計画どおりに実施している業務（B評価）であっても、課題のある事業がいくつか見受けられる。特に、基礎教育センターを中心とする学科再編による数学・理科科目の効果検証及び少人数制と公平性の両立について、問題が生じており、解決に向けて継続して検討が必要だと考える。

結びに、令和5年度は、第2期中期目標期間の5年目にあたり、中期目標の終了2年前となることから、これまでの4年間の成果を検証し、着実に取組を進めていく必要がある。また、2学群体制となり1年目が終了した中で課題となった部分の検証もなされている。これらの検証結果を活かして、多くの学生に、より充実した学びの場を提供できるように、更に進化していくことを期待する。

更に、2学群体制後2年目であることに加え、二つの研究センターの趣旨を実現するための公募型共同研究が開始されており、高い専門性を活かし地域社会をはじめ社会全体に貢献できる研究が促進されることを期待して全体評価の総括とする。

Ⅲ 項目別評価

1 大学の教育研究等の質の向上に関する目標を達成するための取組

(1) 教育に関する目標を達成するための取組

評価委員会 評価	<p>法人の自己評価の項目全体では、14項目のうち1項目がA評価とされ、残りの13項目がB評価とされた。評価委員会としての評価も、全体的には概ね順調な進捗状況であると評価できる。特にA評価とした項目として、分野横断型シンポジウムの一環で博士前期課程の研究発表を一般公開し、市内企業等からも多数の参加者があったことは、高く評価できる。</p> <p>一方、数学科目及び理科科目の少人数制と公平性の両立の問題については、より良い学びの場にするための検討に期待したい。</p>	B (概ね順調)
-------------	---	--------------------

評価結果

評価者	全体 項目 数	A		B		C		D	
		項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比
法人	14	1	7%	13	93%	0	0%	0	0%
評価委員会	14	1	7%	13	93%	0	0%	0	0%

■特筆すべき事項及び評価できる事項

(No.数字=令和4年度業務実績に関する報告書における年度計画No.)

・TOEIC-IPTテストの結果利用 (No.4)

3年次のTOEIC-IPTテストの点数を大学院受験に利用できることは、大学院進学への動機付けという点で効果的と考える。

・入学前教育アンケートの回答率向上 (No.7)

前回は、アンケート回答率の低さが懸念材料となっていたが、令和4年度に回答率が大幅に改善したことは、回答依頼等の働きかけを積極的に行った成果であり、アンケートの精度向上にもつながり、評価できると考える。

・内部進学への促進及び増加のための広報活動 (No.8)

大学院への内部進学者数が前年度に比べて20人増加し、過去5年間で最も多い人数となったことは、適切な広報活動を実施できた成果であり、評

価できると考える。

- ・分野横断型シンポジウムの開催 (No.10)

令和4年度から新たに市内企業等の参加を促し、博士前期課程の研究発表を一般公開して実施したことは、大学の研究を対外的にPRする場を新たに設けたこととなり、シンポジウム開催の意図を広げるものであり、計画を上回る取組であると考ええる。

■今後に期待する事項

下記の事項に関しては、年度計画の着実な実行及び中期計画の達成に向け、さらなる取組を期待したい。

- ・学修成果アンケート (No.2)

回答率を上げる工夫をされたい。一方、学生のアンケート慣れがあり、回答率が上がらない状況であるとも理解している。実際のアンケートの結果は、教員にフィードバックすることが大事であるため、そちらにも力を入れてほしい。

- ・数学科目の科目構成の変更、理科科目の選択必修化及び両科目の少人数クラス制 (No.3)

学生にとって授業の満足度は公平性の問題と直結する可能性がある。特にクラス指定された必修科目については、不公平感が生じやすい。別添資料によれば、担当教員はこの状況を十分把握し、工夫を試みていることがうかがえる。この点において学生・教員双方にとってより良い学びの場にしようという意志が伝わり、評価できると考える。難しい問題だが、今後の検討を期待する。

- ・英語の習熟度別クラス編成 (No.5)

少人数制、習熟度別のクラス編成を行うことで、単位取得率の向上など一定程度の効果が認められたことは評価できると考える。一方で、下位クラスでは、モチベーションについて、負の影響が出る面も考えられるので、今後も経年比較などで検証していくことを期待する。

また、少人数制、習熟度別のクラス編成を行ったことによる効果の検証だが、TOEICテスト等による成績比較による検証も実施すると、より評価としてわかりやすいと考える。

(2) 研究に関する目標を達成するための取組

評価委員会 評価	<p>法人の自己評価の項目全体では、9項目全てがB評価とされた。評価委員会としての評価も、全体的には概ね順調な進捗状況にあると評価できる。</p> <p>共同研究数及び論文投稿数が共に増加したこと、二つの研究センターを新たに設置して活動を開始できたことは、今後に期待できる取組として高く評価できる。</p>	B (概ね順調)
-------------	---	--------------------

評価結果

評価者	全体 項目 数	A		B		C		D	
		項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比
法人	9	0	0%	9	100%	0	0%	0	0%
評価委員会	9	0	0%	9	100%	0	0%	0	0%

■特筆すべき事項及び評価できる事項

- ・共同研究数の増加 (No.16)

共同研究数が前年度と比較して17件増加したことは評価できる。

- ・論文投稿数の増加 (No.18)

論文投稿数、論文掲載数ともに、4年間で最も多い数となったことは、教員への意識啓発の成果であり、評価できる。

なお、論文投稿数の増加傾向は好ましいが、数値目標の達成にのみ縛られず、論文の質の向上に努めることを求めるとともに、今後、外部資金や共同研究の充実など、見える形での成果の蓄積に期待したい。

- ・ソーシャルデザイン研究センター及びバイオサイエンス研究センターの設置 (No.23)

二つの研究センターを新たに設置するため、地域貢献、研究及び産学連携活動を包括的に行うための組織として研究・産学連携推進本部を置くこととし、二つの研究センターの稼働に向けた取組を行ったことは高く評価する。令和5年度には、公募型共同研究の募集が開始されており、高い専門性を活かし地域社会をはじめ社会全体に貢献できる研究が促進されることを期待する。

■今後に期待する事項

下記の事項に関しては、年度計画の着実な実行及び中期計画の達成に向け、さらなる取組を期待したい。

- ・科学研究費助成事業への応募率向上や採択率向上の取組 (No.20)
採択支援実施者数及び採択者数は、横ばいの状態が続いているため、支援体制について検討が必要と考える。

(3) 地域貢献に関する目標を達成するための取組

評価委員会 評価	法人の自己評価の項目全体では、9項目全てがB評価とされた。評価委員会としての評価も、全体的には概ね順調な進捗状況にあると評価できる。	B (概ね順調)
-------------	--	--------------------

評価結果

評価者	全体 項目 数	A		B		C		D	
		項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比
法人	9	0	0%	9	100%	0	0%	0	0%
評価委員会	9	0	0%	9	100%	0	0%	0	0%

■今後に期待する事項

下記の事項に関しては、年度計画の着実な実行及び中期計画の達成に向け、さらなる取組を期待したい。

- ・こども科学教室の代替措置としての動画配信 (No.28)
対面実施の中止による代替措置として、やむを得ず過年度の公開動画の再利用となり、視聴回数は非常に少なかった。しかし、令和2年度及び令和3年度に新規投稿した動画の視聴回数は、令和4年に比べて多い状況である。このことは動画の公開自体は多くの関心を集めているといえるのではないかと考える。対面開催とともに、準備は大変だと思うが、動画だからこそ可能なテーマなど、一部を動画公開とすることも検討してよいのではないかと考える。

(4) 国際交流に関する目標を達成するための取組

評価委員会 評価	法人の自己評価の項目全体では、2項目ともにB評価とされた。評価委員会としての評価も、全体的には概ね順調な進捗状況にあると評価できる。	B (概ね順調)
-------------	--	--------------------

評価結果

評価者	全体 項目 数	A		B		C		D	
		項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比
法人	2	0	0%	2	100%	0	0%	0	0%
評価委員会	2	0	0%	2	100%	0	0%	0	0%

■今後に期待する事項

下記の事項に関しては、年度計画の着実な実行及び中期計画の達成に向け、さらなる取組を期待したい。

- ・海外語学研修への経済的支援 (No.34)

新型コロナウイルス感染症の影響による令和元年度以降の参加者の減少によって、学生間での参加体験の継承が途切れてしまうことが懸念される。平成30年度の水準に戻ることを期待したい。

(5) 教員の資質向上に関する目標を達成するための取組

評価委員会 評価	法人の自己評価の項目全体では、6項目全てがB評価とされた。評価委員会としての評価も、全体的には概ね順調な進捗状況にあると評価できる。	B (概ね順調)
-------------	--	--------------------

評価結果

評価者	全体 項目 数	A		B		C		D	
		項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比
法人	6	0	0%	6	100%	0	0%	0	0%
評価委員会	6	0	0%	6	100%	0	0%	0	0%

■今後に期待する事項

下記の事項に関しては、年度計画の着実な実行及び中期計画の達成に向け、さらなる取組を期待したい。

・授業改善アンケートの実施 (No.36)

授業改善に活用するアンケートの回答率が年々低下しており、回答率が50%に達していないことは、課題であると考えている。その上で、オンラインアンケートは任意となるので回答率は低くなりがちだが、回答内容は信頼できる場合が多いのではないかと考える。

また、紙ベースでの授業時間等を利用したアンケートは、回答率が上がるものの、アンケート慣れによって、まじめに回答しないことも多い。

回答率を上げるとともに、アンケート結果をどのように改善に役立てたかを示すことが重要と考える。差し障りのない範囲で、特に学生へのフィードバックも必要と考える。

2 業務運営の改善及び効率化に関する目標を達成するための取組

評価委員会 評価	法人の自己評価の項目全体では、5項目全てがB評価とされた。評価委員会としての評価も、全体的には概ね順調な進捗状況にあると評価できる。	B (概ね順調)
-------------	--	--------------------

評価結果

評価者	全体 項目 数	A		B		C		D	
		項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比
法人	5	0	0%	5	100%	0	0%	0	0%
評価委員会	5	0	0%	5	100%	0	0%	0	0%

■今後に期待する事項

下記の事項に関しては、年度計画の着実な実行及び中期計画の達成に向け、さらなる取組を期待したい。

・時間外勤務実績 (No.42)

令和4年度は、学科再編や中期計画変更に伴う新たな研究センターの設置の準備等の業務増加により、時間外勤務時間が増加している。これが常態化しないよう注視していく必要があると考える。

3 財務内容の改善に関する目標を達成するための取組

評価委員会 評価	法人の自己評価の項目全体では、9項目全てがB評価とされた。評価委員会としての評価も、全体的には概ね順調な進捗状況にあると評価できる。	B (概ね順調)
-------------	--	--------------------

評価結果

評価者	全体 項目 数	A		B		C		D	
		項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比
法人	9	0	0%	9	100%	0	0%	0	0%
評価委員会	9	0	0%	9	100%	0	0%	0	0%

4 自己点検・評価及び情報公開に関する目標を達成するための取組

評価委員会 評価	法人の自己評価の項目全体では、4項目全てがB評価とされた。評価委員会としての評価も、全体的には概ね順調な進捗状況にあると評価できる。	B (概ね順調)
-------------	--	--------------------

評価結果

評価者	全体 項目 数	A		B		C		D	
		項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比
法人	4	0	0%	4	100%	0	0%	0	0%
評価委員会	4	0	0%	4	100%	0	0%	0	0%

■特筆すべき事項及び評価できる事項

- ・研究分野等のHP掲載 (No.57)

大学HP上で教員の最新の研修内容、研究実績等を発信していくことは、大学のPR及び共同研究等の獲得のためにも有効な取組であり、HPのリニューアルを行った点は評価できると考える。

5 その他業務運営に関する重要な目標を達成するための取組

評価委員会 評価	法人の自己評価の項目全体では、18項目全てがB評価とされた。評価委員会としての評価も、全体的には概ね順調な進捗状況にあると評価できる。	B (概ね順調)
-------------	---	--------------------

評価結果

評価者	全体 項目 数	A		B		C		D	
		項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比	項目数	構成比
法人	18	0	0%	18	100%	0	0%	0	0%
評価委員会	18	0	0%	18	100%	0	0%	0	0%

用語解説

※1：産官学連携コーディネーター

産業界、行政及び地域と前橋工科大学との連携を促進し、前橋工科大学の有する知的資源を効率的に地域に還元することで、地域及び産業の振興に寄与することを目的として委嘱された者

前橋市公立大学法人評価委員会 委員名簿

(五十音順、敬称略)

	氏名	職業、役職等	備考
1	いしい ゆうき 石井 祐樹	メットライフ生命保険株式会社コンサルタント 前橋青年会議所理事長	
2	いとう りょうこ 伊藤 亮子	公認会計士	
3	こじま ひでふさ 小島 秀薫	池下工業株式会社代表取締役会長 前橋商工会議所議員	
4	ごとう さゆり 後藤 さゆり	共愛学園前橋国際大学副学長	副委員長
5	たかやま としひろ 高山 利弘	群馬大学情報学部学部長	
6	はないずみ おきむ 花泉 修	群馬大学大学院副理工学府長	委員長

任期：令和4年4月1日から令和6年3月31日まで